太宰府天満宮の御輿修造

毎年9月21～25日に行われる太宰府天満宮の神幸式大祭では、道真公の御神霊が御輿（御神輿）に乗り、かつて住まいのあった榎社に御神幸します。現在の御輿は明治になって造られたものですが、それより遥かにさかのぼった戦国時代中頃の天文8（1539）年に、天満宮社家の満盛院が御輿を修造した史料が残っています。

同5（1536）年に、筑前国守護の大内義隆は満盛院に対して、期限を決めて御輿の修造を仕上げるよう命じていました。ところが、その旨を書いて渡した奉書を、義隆は3年後になって満盛院に進上するよう指示し（3年前に出した命令の内容を確認するため）、また修造に必要な費用を御輿奉行と相談して上申せよとも言っているので、作業は3年経ってもまだ完成していなかったようです。

これに対し満盛院の院主快闇は、指示通り大内氏から渡された奉書を差し出しましたが、費用について上申する件は「その必要はありません」と断っています。一方で快闇は、先代の快竹が御輿を復興した時の図面を大内氏に提出しました。それには御輿の装飾金具の足りない分が記されていて、加えて近年に快闇がいくつか金具を付け足した分が書き込まれていたそうです。快闇は費用については、この図を見て判断していただきたいと主張しています。また、先代快竹の時には費用が支払われなかったけれども、苦労して修造を果たした話を引き合いに出しつつ、残りの金具ほか装飾などを油断なく用意していると伝えています。

続いて、10年ほど後の同17（1548）年から19（1550）年の間にも、満盛院は御輿の修造をしています。この時は出来上がりが遅れたため、大内義隆は罰として廻廊一間分の屋根の上葺を課しています。

このように天満宮の御輿の修造をめぐって、大内氏と満盛院の駆け引きの様子をうかがうことができます。

太宰府の文華
～公文書館だより㉒～

【バックナンバーはこちら】
ページID7241

太宰府市公文書館　大塚　俊司